

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23330041

研究課題名(和文) 米国内政再編成とイデオロギー的分極化及び超党派主義—予備選挙に着目して

研究課題名(英文) Party Realignment, Ideological Polarization and Bipartisanship in the United States: An Analysis of Primaries

研究代表者

久保 文明(kubo, fumiaki)

東京大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：00126046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,800,000円

研究成果の概要(和文)：イデオロギー的分極化の原因としての予備選挙の重要性について、2012、2014、2016(3月まで)年の大統領選挙・議会選挙に対する現状分析を行いつつ、過去の事例も踏まえて考察し、本研究での仮説をかなりの程度検証できた。2010年に台頭した共和党内勢力である茶会党が、予備選挙制度を通じて勢力を伸ばし、かつ共和党を一層右傾化させたことは、その鮮やかな証左であった。

同時に、硬直化した分極化現象への批判も存在する。研究成果では15年に顕著になったトランプ現象にも言及することにより、既成の政党支持パターンは攪乱されており、近年単線的に続いてきた分極化が転換点に来ている可能性も示唆した。

研究成果の概要(英文)：Series of analyses were conducted in this project to prove that the primaries are at least one of the most important causes for ideological polarization of the politics and the political parties of the United States. Just during the period of this research project, the Tea Party has risen to prominence in the Republican Party even to bring about a government shutdown in 2013. Without the primary system, its rise would have been impossible. By embracing the Tea Partiers, the Republican Party pushed itself to further right.

However, the rise of Donald Trump in the 2016 presidential election might suggest that this rigid pattern of ideological polarization is coming to its limits so much so that it is dislocating the existing pattern of political party alignment. Some of the research products in the final year mentioned this possibility.

研究分野：アメリカ政治

キーワード：アメリカ リベラル 政党 イデオロギー 分極化 予備選挙 超党派主義 保守

1. 研究開始当初の背景

(1)研究の学術的背景(1)。米国での米国政治研究では、二大政党のイデオロギー的变化を世論や有権者の意識という点から説明しようとする研究が眼についた。そこでは、政党を「有権者の中の政党」(party-in-the-lectorate)、政党組織(party organization)、公職にある政治家集団としての政党(party-in-office)の三要素に分解して考察する方法が支配的であった。とくに「有権者の中の政党」に注目し、政党への一体感の強弱等を基準に、政党の衰退を論ずる傾向が強い。しかし致命的なことに、この方法は政党の中核部分である政治家集団を無視していた。

(2)研究の学術的背景(2)。政党研究一般ではサルトーリやデュベルジュら主としてヨーロッパの政党を前提にした研究がこれまで影響力をもってきたが、これでアメリカの政党とその変容のメカニズムを解明することは不可能である。アメリカの政党には強力な権限をもった指導部が存在せず、公認候補はすべて党员による予備選挙で決定され、指導部にその権限はない。すなわちアメリカでは上からの政党変容は構造的に起こりにくい。地道に予備選挙に介入し、グラスルーツ・レベルで自らの政策を支持する候補者を公認候補に押し上げる政治力をもつ政治勢力が大きな役割を果たすのであり、そこに党外の利益団体や政治運動とその影響力を分析する必要が生まれる。

注目すべき先駆的研究として、Baer & Bositis, *Elite Cadre and Party Coalition* (1988)があるが、この研究は政治運動や利益団体を考察の対象から除外しており、また大統領選挙のみを分析している。本研究ではそのような限界を補う意味で、利益団体や政治運動による政党への浸透をも対象とし、とくに予備選挙に分析を集中させることにより、より包括的に政党と政党を支援する外部勢力(利益団体、社会・政治運動など)との関係を考察する。

(3)研究の学術的背景(3)。最近公刊されたアメリカにおける政党研究のうち、本研究と密接に関係するもので注目に値するものとしては、次の著作がある。Donald Green et al, *Partisan Heats & Minds* (Yale University Press, 2002); Barbara Sinclair, *Party Wars* (University of Oklahoma Press, 2006)。しかし、前者は変化のメカニズムに関してはほとんど語ってくれない。後者は逆に変化の要因、あるいは政党周辺の政治運動との関係を捨象している。

2. 研究の目的

(1)そこで、本研究では、政党の公職者(とくに連邦議会議員)とそれを支援する政党外部の集団・団体・政治運動の関係を重視した。有権者レベルではなく、それより上位の政治家・団体活動家レベルの考察に集中した。こ

こでの仮説は、民主党・共和党双方において、それぞれを支援する集団・団体・政治運動の連合の性格の変容が政党の変化をもたらした、とするものであった。共和党では、こんにち宗教保守派団体、中小企業団体、減税推進団体などが相互に協力しあう「連合」(coalition)態勢を構築している。このように、本研究は、さまざまな利益集団・政治運動の連合という点を重視した分析であり、また政党と利益団体の関係の構造的変化に着目した研究でもある。

(2)同時に、多くの研究は分極化の側面に圧倒的に多くの関心を寄せている中で、本研究は並行して起きつつある超党派の試みないし動向についても、二大政党内の穏健派指導者に焦点をあてて分析を行った。これについては、アメリカの政治学界においても本格的な研究はまだ存在しない。

(3)要するに、本研究では、現代アメリカの政党がいかなるメカニズムを通じて変容したかを解明しようとした。最近 30 年間、アメリカの民主党・共和党どちらもが、その政策的・イデオロギー的立場を大きく変容させてきた。民主党内ではリベラル派がかつての支配力を失い、穏健派の台頭を許すに至った。他方で共和党では穏健派が劇的に衰退し、保守派が党内での主導権を握るようになった。現在両政党はイデオロギー的に整序され、分極化した政党制となっている。このような政党の変化はアメリカでいかなるプロセスを経て起きたのであろうか。

3. 研究の方法

(1)イデオロギー的分極化のメカニズム解明には巨大な作業が必要となるが、本プロジェクトでは二大政党の予備選挙を主たる分析対象とした。すなわち、こんにちのアメリカ政治の重要な特徴の一つであるイデオロギー的分極化につき、その原因と動向につき、これまで学界の中心的な関心であった決定的選挙に分析を集中する方法ではなく、予備選挙を通じての漸進的な政党のイデオロギー的性格の変化という側面を強調して解明しようとしてきた。2010年11月の中間選挙に向けた共和党の予備選挙において、ティーパーティ系の候補が相次いで勝利し、同党をさらに右に持っていこうとしているが、このことは本研究の基本的認識と方向性が正しいことを証明している。予備選挙については新しい事例も加えた事例研究の積み重ねを行った。とくに2014年6月にはミシシッピ州共和党上院予備選挙を現地視察した。

(2)超党派主義の動向については、まずは議会民主党・共和党それぞれにおける穏健派議員連盟に焦点をあてた。前者ではブルードッグ連合とニューデモクラット連合、後者では火曜グループが中核的な重要性をもつ。これらの議員連盟に所属する議員の支持基盤、支援団体、政策的態度との関係について、予備選挙・本選挙合わせて、主として事例研究によ

る把握を目指した。

(3)現地調査を実施 二大政党内のさまざまなイデオロギー集団を代表する議員あるいは議員スタッフに対する聴き取り調査、およびそれぞれのイデオロギー集団と密接な関係をもつ政党外部のさまざまな政治団体あるいは政治運動の指導者に対する聴き取り調査を実施した。

共和党保守派に関する調査においては、ティーパーティー運動の同党予備選挙における躍進とサラ・ペーリン前副大統領候補に対する支持の高まりも視野に入れた。ここでは、久保がすでに立ち上げた分析を行った経済成長クラブとティーパーティーの関係も重要な分析対象になった。

超党派主義に対する支持についても、民主党・共和党穏健派政治家およびそのスタッフに対する分析を行った。同時に、核不拡散や核廃絶(例えばグローバル・ゼロ)を求める政策集団、財政均衡を求める運動(コンコード連合)、地球環境保護を重視する宗教保守派の運動、人工妊娠中絶を減らす試み、教育政策、選挙資金改革(マケイン=ファイナゴールド法)など、政策領域によって散発的に存在する超党派の動向とその支持基盤について、調査した。

4. 研究成果

(1)本研究の独自性として、とくに<<「決定的選挙」(critical election)なき政党変容>>という視点を強調したい。通常「決定的選挙」は政党制の変容との関係で、すなわちアメリカの二大政党間の力関係の長期的な変化を理解しようとする際に援用される議論であるが、本研究にも重要な視角を提供する。なぜなら、そのような政党の支持基盤の長期的な拡大あるいは縮小が起きる際には、個々の政党についても支持集団、支持団体の変化に起因する変化が起きてきたからである。問題は、現代においては1932年を最後に、それまでみられた決定的選挙が起きていない点である。他方で、政党の性格自体は、たとえば1960年代までの民主党が南部を基盤にしていたのに対して、今日ではむしろ南部では劣勢になっていること一つからも理解できるように、決定的選挙が不在でも政党の変化は大きな規模で起きている。これが本研究が引き出した重要な研究成果である。

同時に重要なのが、近年民主党から保守派が抜け、共和党でリベラル派が衰退した結果、イデオロギー的傾向をもつ利益団体との関係が劇的に変化したことである。これによって、政党とそのような利益団体の関係はより固定的なものに変化した。中小企業団体、宗教保守派など、いくつかの団体は公認候補決定過程=すなわち予備選挙=で重要な影響力を發揮しており、政党内政党に近い機能すら果たすようになっている。投票率が低く知名度の低い候補者が乱立する予備選挙では、早くから資金でも集票能力でも強力な運動が特定の候

補を支援すると、それは選挙結果に大きな影響を及ぼすことができる。

予備選挙に焦点を宛てることにより、予備選挙による公認決定というわが国とまったく異なる構造をもつアメリカの政党における変化のメカニズムを解明することが可能となった。この研究によって、比較政党論の中でも、いまだ十分に理解されていないアメリカの二大政党を正しい文脈のなかに位置づけることが可能になり、決定的選挙にこだわったアメリカの政党論の混乱を成功裏に批判できた。(2)分極化と同時に、外交・財政・社会保障・貧困・宗教などに関わる争点において、超党派主義を回復ないし模索する具体的な動きや提案が少なからず存在することにも、本研究は注目した。分極化についての批判的研究は、日米ですでに多数蓄積されているが、それを克服する動き・試み(たとえばスタンレー財団による Derek Chollet, Tod Lindberg, and David Shorr eds, *Bridging the Foreign Policy Divide*, 2007)、およびその政治的基盤についての分析はほとんど存在しなかった。本プロジェクトでは、この側面についても、有権者レベルではなく、エリートないし集団ベースの仮説を立て検証した。それぞれの政党の穏健派集団が、安全保障、宗教、財政など、さまざまな政策領域において、両党の端(共和党保守派、民主党左派)に対抗する政治的・政策的試みに着手していることを解明した。ただし、穏健派には予備選挙で支援を期待できる政党外部の団体からの支持が欠如していることが重要である。核廃絶や対日政策が超党派的色彩を強くもつことを考慮すると、このような現象についての研究は、学術的文脈のみならず実践的な意味においても重大な含意をもつものといえよう。

(3)基本的視角は、かつてのように1回の選挙で政党の性格も政党制も一挙に変わった政党再編論はこんにちもはや妥当せず、そのような選挙なしで現代米国の政党は徐々に、とくに予備選挙を通じて緩慢に変容する、という見方にある。2010年の中間選挙で進出したティーパーティー運動は、グラスルーツのエネルギーとエリートの外部団体からの資金流入が重なる、すでに保守的な共和党をさらに右に移動させる起爆剤となり、本研究の仮説が正しかったことを裏打ちしてくれた。同時に、分極化を緩和しようとする超党派主義の模索は事実として存在するものの、両党の穏健派は政党外部での支援団体をさほどもたず、政治的基盤という点でいまだ脆弱であると暫定的に結論付けられる。

(4)2015年後半からは、共和党の大統領候補指名争いで、典型的な保守派とは異なる政策を掲げたドナルド・トランプが登場し、既存のイデオロギー的分極化状況を少なくとも一部、また一時的に融解させた。これは外交、経済、宗教など、さまざまな争点について妥当する。ある意味で、二大政党の間のイデオロギー的分極化が極端に進行した帰結につ

いて、グラスルーツの共和党一般党員が反乱を起こした結果であるともいえる。全く予想外の現実政治の展開であったが、本プロジェクトでは、二大政党の在来の支持基盤の一部組み換えを引き起こす可能性を秘めた現象として鋭意分析に取り組んだ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 24 件)

久保文明、「日経経済教室：米大統領選が映すもの」、『日本経済新聞』、査読無、2016年3月31日版、37頁。

久保文明、「トランプ旋風の風土」、『公研』、査読無、2016年3月号、16-17頁。

久保文明、「パリ同時多発テロが米大統領選に与える影響」、『中央公論』、査読無、2016年1月号、14-15頁。

久保文明、「書評 ヒラリー・R・クリントン『困難な選択』(上下、日本経済新聞社、2015年)」、日本経済新聞、査読無、2015年6月28日版、23頁。

久保文明、「2016年米大統領選挙の見方—民主党三連勝の可能性」、『學士會会報』、査読無、No.912、2015年5月、44-48頁。

松岡 泰、「オバマ政権による対キューバ政策の転換の背景」、『アドミニストレーション』、2015年3月、151-169頁。

菅原和行、「アメリカ連邦官僚制における中立的な能力と応答の能力の動態—職業公務員と政治任用者に対する政治的要請の変化を中心に」、『釧路公立大学紀要社会科学研究』、査読無、第27号、2015年、pp. 39-55。

久保文明、「オバマ大統領に立ちはだかる三つの試練」、『中央公論』、査読無、2015年1月号、98-106頁。

久保文明、「経済教室・中間選挙オバマ大敗」、『日本経済新聞』、2014年11月11日版。

久保文明、「ミシシッピ州上院共和党予備選挙の動向」、『東京財団ホームページ：プロジェクト(現代アメリカ)論考

(http://www.tkfd.or.jp/research/project/new_s.php?id=1333)、査読無、2014年9月16日。

久保文明、「”本命”クリントン危険に満ちた長すぎる選挙戦—2016米大統領選の見方」、『外交』、査読無、Vol.26、2014年7月号、92-95頁。

久保文明、「オバマ外交のヴィジョン—あるいはオバマ外交にヴィジョンはあるか?」、『国際問題』、査読無、No.630、2014年4月号、1-4頁。

Fumiaki Kubo, "Japan's Foreign and Security Policy toward the United States: Between Pacifism and the Logic of Alliance," *Japan's Vision for*

East Asia: Diplomacy amid Geopolitical Challenges edited by Shihoko Goto, Wilson Center, 査読無、2014年18-29頁。

久保文明、「アメリカ保守勢力の思想(21世紀初頭)」、『歴史学研究会編『世界史資料 21世紀の世界』、査読無、12巻、2013年、106-108頁。

久保文明、「遠のく「一つの米国」」、『公明新聞』、2013年10月29日版。

久保文明、「経済教室：米国内政の混乱(上)」、『日本経済新聞』、2013年10月25日版。

Fumiaki Kubo, "The Second-Term Obama Administration and Japan," *Asia Pacific Review*, 査読有、Vol. 20, Issue 1, May, 2013, pp.24-34.

久保文明、「米国からの視点を中心に—オバマ大統領再選と米外交の課題」(講和独立60周年記念シンポジウム「世界のリーダーシップ交代と新たな戦略環境を考える—アジア太平洋の安全保障構図」、『防衛学研究』、第48号、2013年3月、42-55頁。

久保文明、「米大統領選挙の結果から見る米国内政の現状—オバマ政権2期目を展望しながら」、『學士會会報』、査読無、第899号、2013年3月、4-14頁。

Fumiaki Kubo, "Prime Minister Abe and President Obama Can Strengthen the Alliance," *AJISS-Commentary No.171*, February 20, 2013, (http://www2.jiia.or.jp/en_cemmentary/201302/19-1.html), re-published with minor modifications on the website of the English Speaking Union of Japan, February 28, 2013.

②① 久保文明、「二期目のオバマ政権」、『読売クォーターリー』、査読無、No.24、2013年冬号、58-67頁。

②② 久保文明、「オバマ再選の勝因と2期目の展望」、『外交』、査読無、Vol. 17、2013年1月号、100-105頁。

②③ 久保文明、「アメリカ政治における環境保護エネルギー政策の位相—イデオロギー的分極化のなかで」、『JX日経日石リサーチ・ホームページ』、2012年5月 (http://www.rs.jx-group.co.jp/library/files/20120511_contribution.pdf.)

②④ 久保文明、「アメリカはどこへ行くのか—2012年大統領選とその後」、『公研』、2012年1月、54-81頁。

[学会発表](計 30 件)

Fumiaki Kubo(パネリスト) "Two Civil Wars in US Major Political Parties and their Implications for Foreign Policy," *JIIA-CICIR*

workshop (日本国際問題研究所・中国現代国際関係研究院ワークショップ) 2016年3月8日~9日、北京、中国。

Fumiaki Kubo(パネリスト) "Two Civil Wars in US Major Political Parties and their Implications for Foreign Policy," JIIA-IISS(PKU) workshop (日本国際問題研究所・北京大学国際戦略研究院ワークショップ) 2016年3月8日、北京、中国。

久保文明(司会・趣旨説明・総括)、第3部「米国の対外政策に影響を与える国内的諸要因」、財団法人日本国際問題研究所主催、JIIA 公開シンポジウム「国際秩序動揺期における米中の動勢と米中関係」、2016年2月24日、国際文化会館(東京都港区)

久保文明(パネリスト)「日米中関係の新展開-中国の台頭とアジア太平洋秩序」、熊本県立大学国際シンポジウム2015、2015年11月7日、ホテル日航熊本(熊本県熊本市)

久保文明(パネリスト) Panelist for the Panel 2, "The East China Sea Challenge: Moving Towards Stability?" Workshop, "Asia's Cauldrons-The East and South China Seas: What Happens Next? Workshop on Asia-Pacific Security," September 28, 2015, Washington, D.C., USA.

山岸敬和、「所得格差をオバマケア」、日本国際問題研究所プロジェクト「国際秩序動揺期における米中の動向と米中関係」のサブプロジェクト、2015年7月14日、日本国際問題研究所(東京都千代田区)

山岸敬和、「最新のオバマケアの動向」、東京財団、2015年6月8日、東京財団(東京都港区)

久保文明(パネリスト)、「「平和戦略」—危機時の外交、核不拡散」セッション、ケネディ大統領リイブラリ財団・早稲田大学共催、シンポジウム「引き継がれるケネディ大統領のトーチ—今日に至るその遺産」、2015年3月18日、早稲田大学(東京都新宿区)

久保文明(招待講演) 基調報告「オバマ外交の評価と課題-2014年中間選挙から16年大統領選挙に向けて」、貿易研修センター国際情勢シンポジウム『現下の国際情勢と日本を考える』、2014年12月11日、東海大学学友会館、霞が関ビル(東京都千代田区)

山岸敬和、「オバマケアの執行過程をめぐる政治的争い」、アメリカ政治研究会、2014年12月、慶應義塾大学(東京都港区)

久保文明(招待講演) 基調講演「アメリカの行方」、経済広報センター主催講演会『米国の行方-10年後の米国の姿を占う』、

2014年11月21日、経団連会館(東京都千代田区)

山岸敬和、「アメリカ医療制度の政治史」、中部政治学会、2014年8月、名古屋大学(愛知県名古屋市)

Fumiaki Kubo (Lecturer, 招待講演) "The Challenges of Asymmetrical Alliance: Japan and the U.S." The University of Pennsylvania, Penn Program on Democracy, Citizenship and Constitutionalism, co-sponsored by the Center for East Asian Studies and the Browne Center for International Politics, Seminar, April 23rd, 2014, Philadelphia, USA

Fumiaki Kubo (Lecturer, 招待講演), "The Pacific World: The Dynamics and Challenges of Asymmetrical Alliance-The United States and Japan," Temple University, the Center for the Study of Force and Diplomacy, April 17th, 2014, Philadelphia, USA.

Fumiaki Kubo, (Panelist), US-Japan Research Institute, Seminar, "Sino-Japan Dynamics and Implications for the U.S.-Japan Alliance," February 27th, 2014, Embassy Row Hotel, Washington, DC., USA.

久保文明、基調講演「米国リバランス政策について」、世界平和研究所主催公開セミナー『日米同盟の展望: 米国のリバランス政策と今後の日米同盟』、2013年11月6日、グランドヒル市谷(東京都新宿区)

久保文明、(招待講演)、基調報告 "US-Russia Relations: President Obama's Policy toward Russia, 2009-2013," 第4回日露学術報道専門家会議、2013年9月18日、モスクワ国際関係大学、モスクワ、ロシア。

久保文明(講師、招待講演)「マイノリティの増加とアメリカ政治の将来~変わるものと変わらないもの~」、国際文化会館「アイハウス・ランチタイム・レクチャー」、2013年7月19日、国際文化会館(東京都港区)

久保文明(講師、招待講演)「アメリカにとって同盟とはなにか」、日本国際問題研究所 JIIA フォーラム、2013年7月19日、日本国際問題研究所(東京都千代田区)

菅原和行、「アメリカ政治の変貌と官僚制」、日本政治学会第2013年度研究大会、分科会 B-5「変貌する英米政治: 大統領制化する議院内閣制、議院内閣制化する大統領制」、2013年9月15日、北海学園大学(北海道札幌市)

② 山岸敬和、「“オバマケア”と転換期のアメリカ」、アメリカ学会、2013年6月、

- 東京外国語大学(東京都府中市)。
- ② 松岡 泰「移民問題の諸相」部会C「移民問題の現在」、アメリカ学会第47回年次大会、2013年6月2日、東京外国語大学(東京都府中市)。
- ③ 久保文明(パネリストおよびモデレーター、招待講演)「米国大統領選挙後の日米関係」、日米協会主催・特別討論会、2012年11月26日、国際文化会館(東京都港区)。
- ④ 久保文明(招待講演) 講和独立60周年記念シンポジウム「世界のリーダーシップ交代と新たな戦略環境を考える—アジア太平洋の安全保障構図」基調講演「米国からの視点を中心に」、日米防衛学会、2012年11月22日、防衛大学校(神奈川県横須賀市)。
- ⑤ 久保文明(パネリストとして講演)、「北東アジアの变革と国際経済、日米関係」、日米経済研究センターとブルッキングズ研究所共催シンポジウム、2012年11月28日、経団連ホール(東京都千代田区)。
- ⑥ 久保文明(招待講演)「米大統領選挙の結果から見るアメリカ政治の現状」、学士会午餐会、2012年11月20日、学士会館(東京都千代田区)。
- ⑦ 久保文明(招待講演)「アメリカ衰退論とアメリカ研究の将来」、同志社大学アメリカ研究夏季セミナー、2012年7月28日、同志社大学(京都府京都市)。
- ⑧ 久保文明(招待講演)「オバマ政権の評価と2012年大統領選挙」、「権力移行期の世界6 アメリカ」研究会(日本記者クラブ) 2012年4月25日、日本プレスセンタービル(東京都千代田区)。
- ⑨ 久保文明(アメリカの東アジア政策についてパネリスト)、「日台フォーラム」(財団法人兩岸交流遠景基金會・海洋政策研究財団共催)、2011年11月19日、台北、台湾。
- ⑩ 久保文明(講師)、「The US-Japan Relations after the Great Earthquake,」East West Center, Nov. 3, 2011, Honolulu, Hawaii.

〔図書〕(計 14件)

久保文明、21世紀政策研究所新書、『2016年米国外交と日米関係の展望』、2016年、91ページ。

研究主幹：久保文明、21世紀政策研究所、『アメリカ政治の現状と課題』、2015年、113頁。

久保文明解説、ジョゼフ・S・ナイ著、日本経済新聞社、『アメリカの世紀は終わらない』、2015年、248頁(199-211頁)

松岡 泰、熊本県立大学総合管理学会編九州大学出版会、『総合知の地平』、2014年12月、389頁(21-38頁)

山岸敬和、名古屋大学出版会、『アメリカ医療制度の政治史 20世紀の経験とオ

バマケア』、2014年3月、369p.
ジェフリー・サックス著、櫻井祐子訳、久保文明解説、早川書房、『世界を動かす—ケネディが求めた平和への道』、2014年、360頁(pp.226-231.)

久保文明編、弘文堂、『アメリカの政治・新版』、2013年、288頁。

久保文明・高畑昭男・東京財団、NTT出版、『現代アメリカ』プロジェクト『アジア回帰するアメリカ 外交安全保障政策の検証』2013年、217pp。(pp.i-v.)

久保文明編、公益財団法人日本国際問題研究所監修、中央公論新社、『アメリカにとっての同盟とはなにか』、2013年、362pp。(pp.3-30.)

久保文明、松岡泰、西山隆行、東京財団「現代アメリカ」プロジェクト編著、NTT出版、『マイノリティが変えるアメリカ政治 多民族社会の現状と将来』2012年、189pp。(久保文明 i-x 頁)(松岡泰 27-46 頁、107 125 頁)(菅原和行 71 - 86 頁)。

久保文明・中山俊宏・渡辺将人、NTT出版、『オバマ・アメリカ・世界』、2012年、iv+278pp.

久保文明・東京財団、NTT出版、『現代アメリカ』プロジェクト編『ティーパーティー運動の研究—アメリカ保守主義の変容』、2012年、181pp.(pp.iii-x.)

亀山康子・高井ゆかり編、久保文明 他、慈学社出版、『気候変動と国際協調—京都議定書と多国間協調の行方』、2011年、407pp。(pp.184-209.)

筒井清忠編著、久保文明 他、千倉書房、『政治的リーダーと文化』、2011年、328pp。(pp.201-231.)

〔産業財産権〕該当せず

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 文明 (KUBO, Fumiaki)
東京大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授
研究者番号：00126046

(2) 研究分担者

山岸 敬和 (YAMAGISHI, Takakazu)
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：00454405

松岡 泰 (MATSUOKA, Yasushi)
熊本県立大学・総合管理学部・教授
研究者番号：40190425.

菅原 和行 (SUGAWARA, Kazuyuki)
釧路公立大学・経済学部・准教授
研究者番号：90433119

以上